

1920年代における探偵小説創作の黎明

——近代中国と日本の「雑誌空間」を通じて——

池田 智恵

The Dawn of the Mystery Novel in the 1920s:
Periodicals as Communicative Space in Modern China and Japan

IKEDA Tomoe

From the Sino-Japanese perspective, the mystery novel is an import, and something that arrived from the West. In both countries, with translation, the mystery novel became extremely popular, and in the 1920s, attempts were made at creating indigenous mysteries. Periodicals devoted to mysteries began to be published: in China, *Zhentan shijie* 偵探世界, *Banyue* 半月, and *Ziluolan* 紫羅蘭, and in Japan, *Shinseinen* 新青年. This paper explores the reception phases of the mystery novel through an examination of the readers' submissions published in these various magazines. In comparing the creative conditions of the two countries, Japan succeeded in developing younger writers through literary awards, while in China, the authors never succeeded in mastering the structure of the mystery novel, and were troubled with the production of this new literary genre. The authors who never conquered the "modern novel" become distinct.

キーワード：探偵小説、半月、紫羅欄、偵探世界、新青年、読者投稿

1 近代探偵小説研究の問題点——中国と日本の場合

1-1 近代エンターテインメント小説研究の意味

近代において、世界的に文化に大きな変化が発生したということは言うまでもない。この変化の一部として文学が大きく変化した。この変化は19世紀より西洋から始まったが、20世紀初頭前後には、アジアに波及した。特に中国や日本においてはこの文学の変化の一部として、いわゆる純文学と娯楽をその目的としたエンターテインメント小説——いわゆる大衆小説が誕生した。この二つの小説の誕生は、その後の文化をつむいでいくにあたって大変大きな要素となっている。

だが、これらの小説を語る際、今までその対象となってきたのはいわゆる純文学であった。もし近代において、現在研究されてきた純文学のみが産出されたのであれば、その論じ方は是と言えるが、前述

したように、残念ながらそうではない。

近代中国でも、例に漏れず、小説の変化として純文学——いわゆる魯迅らを中心とした五四文学——といわれる鴛鴦蝴蝶派と称された娯楽を目的とした近代的エンターテインメント小説が誕生した。

これまでの中国近現代文学史において、五四文学の作家とその作品の成立・内容、形式の変遷、またその言語的側面などの多岐に渡る研究が、多くの研究者によって取り組まれ、文学史の主流を形作ってきた。

一方で、近代に誕生したエンターテインメント小説に関しては、当時、圧倒的に人気を誇り、多くの読者を獲得していたにも関わらず、1980年代の陳平原らによる文学史の再考運動まで研究分野として顧みられず、黙殺されてきた。つまり、それまでの近現代文学史というのは、五四文学などの主流文学の歴史に過ぎず、近代に起きた文化の変化の半分を描いたものでしかなかった。

そして、近代エンターテインメント小説に関しては、1990年代になって、范伯群などにより、初めて文学史が編まれ¹⁾、注目を集め始め、ちらほらと研究が見られるようになってきた。

近代中国における小説の近代化の全貌を明らかにするためには、近代エンターテインメント小説の成立と発展を明らかにし、現在存在している文学史とあわせて考えなければならない。近代エンターテインメント小説は、明清白話小説の延長としてとらえられがちであり、近代の小説が明清代のものから如何に飛翔し、近代へと着地したかについては、特に研究は進んではいない。

そこで筆者は、中国近代におけるエンターテインメント小説の成立の諸相を明らかにするという問題意識に基づき、探偵小説という切り口から考えている。

探偵小説は、言うまでもなく1840年代にアメリカの作家エドガー・アラン・ポーによって発明されて以来、フランスやイギリスに伝播し、その後裔としてエミール・ガポリオやシャーロック・ホームズを生み、近代エンターテインメント小説の代表的小説ジャンルとなっていく。その成立は近代的ジャーナリズムと深く関係があるとされる。探偵小説は、近代における新聞とそれを読む読者との間から生まれた、近代の産物ともいえる小説ジャンルなのである。

探偵小説の謎解きのような要素を持ったものとして、東アジア——ここでは特に日本と中国を取り上げるが、近代以前に、中国では『包公案』、日本では『大岡政談』のような、名裁判官の話が存在していたが、謎解きとその過程を読みどころとする近代的な探偵小説というのは、新しい小説であった。

中国の近代エンターテインメント小説は、筆者は明清白話小説とある種の断絶があると考えているが、先ほど述べたように、近代エンターテインメント小説は、古典小説の延長と考えられてきた傾向が強い。そこで、筆者は、古典小説から継承が存在し得ない、新しいジャンルである探偵小説を、近代中国が如何に受け入れ咀嚼し、本土化していったかを考えることにより、近代探偵小説、または近代エンターテインメント小説成立の一側面を明らかにしたいと考えている。

1-2 中国近代探偵小説研究とその課題

次に、現在までの近代中国探偵小説に関わる研究とその問題点について考えておきたい。中国の近代

1) 《中国近现代通俗文学史》 范伯群主编 江苏教育出版社 1999年

探偵小説に関する研究はそう多くない。前述の通り、1990年代末より、范伯群主編の『中国近現代通俗小説史』の「偵探推理編」や、湯哲声の『中国現代通俗小説思辨録』（北京大学出版社 2008年3月）などにより、清末期の翻訳小説ブームの中で、探偵小説が一番人気を博していたことや、1920年以降に近代エンターテインメント小説雑誌において、創作が出現したこと、その作家や作品などが紹介されている。

近年には、姜維楓による『近代偵探小説作家程小青研究』（中国社会科学出版社 2007年10月）などによって、1920年代以降の創作探偵小説で最も代表的な作家である程小青の生涯とその創作についての細かな研究が出現した。

また国内においては、清末期の翻訳探偵小説ブームにおけるシャーロック・ホームズの流行とその翻訳作品、またその流行を受けて書かれた贋作作品などを中心に論じた樽本照雄による『漢訳ホームズ論集』²⁾や、近代探偵小説の概略を述べた阿部泰記による論考「中国近代における探偵小説の創作」³⁾などがある。

だが、いずれも概略や紹介といった内容に終始している傾向が強い。清末の翻訳探偵小説のブームに着目しているものは、如何に中国が探偵小説を翻訳したか、という問題に終始しており、翻訳作品を近代中国がいかに消化して、本土化した作品を生んでいったか、というもう一段階進んだ内容には、踏み込んでいない。また程小青など代表的な作家や作品を取り上げてはいるが、探偵小説というムーブメントがその当時の社会にとってどのような意味があったかなどについては考えられていない。そこで、探偵小説をひとつの文化現象としてとらえ、翻訳から創作へ、そしてその探偵小説を創作するということは何を意味していたのかを考えていくことは意義があると言えるだろう。

1-3 消失した探偵小説——中国と日本の異なる近代性

実は、中国における近代探偵小説の発展は、日本のそれと比べてみると、たいへん興味深い。中国と日本とは、中国で晩清に、日本では明治期に翻訳小説の受容、またその流行の中で、探偵小説を受け入れ、その後、自国の探偵小説を生んでいったという大まかな流れは共通している。しかしながら、その後の探偵小説の発展ということを考えると異なっているのだ。

日本においては、探偵小説は、もちろん戦争による断絶の時期などが存在したが、現代に至ってはエンターテインメント小説の主流へと成長を遂げた。

中国においては、1920年代、1930年代初頭に創作探偵小説の短く一部的なブームを迎えるが、1940年代には、創作自体が次第に下火になっていってしまう。これは、1920年代に中国に武侠小説というエンターテインメント小説ジャンルが確立、人気を博していくのと反比例している。そして中国において創作探偵小説——ただし「推理小説」と呼ばれるようになっているが⁴⁾——が再出現するのは、1990年代

2) 大阪経済大学研究叢書 第52冊（汲古書院 2006年10月）

3) 『樋口進先生古稀記念 中国現代文学論集』（中国書店 1990年3月31日）所収

4) 中国は1990年代半ばにインターネットが普及し、インターネット上に多くの日本や欧米の戦後の「推理小説」が氾濫した。「80後（80年代生まれ）」と呼ばれる若者がネット上の日本の新本格などの推理小説を愛読し、またネット上でインターネット小説として推理小説を書くなど新たなブームが始まった。多くの世代は、戦後の「推理小説」を

になってしまう。中国における近代探偵小説の消失については、もちろん、新中国へと向かう大きな時代のうねりを無視することはできないが、1930年代の創作数の減少などを考えると、探偵小説を支える読者の探偵小説の想像力自体が失われてしまったのではないかと考えられる。

中国でなぜ近代探偵小説が消えてしまったのかについて、湯哲声は「中国の探偵小説が十分に発展し得なかったのは、人々（学术界を含む）には比較的一致した見方がある、それは中国社会に法制観念が欠けていたということである」⁵⁾と述べ、さらに湯哲声自身は、探偵小説は聡明な探偵、愚鈍な警察という構図が、19世紀以降の西側社会の「私有財産は神聖にして侵すべからず」という考え方を反映した個人の利益を守るというイデオロギーに基づいていて、中国の「大我」の下に「小我」が存在する—つまり国家利益が個人の利益よりも重要であるという伝統的な文化、伝統規範にあわなかったのだ、と述べている。⁶⁾

筆者は、これらの考えを必ずしも否定するものではない。そういう一面もあったのかもしれない。しかしながら、これらが、探偵小説の消失に関わる主たる理由とはなかなか考えがたい。なぜなら、現在までの先行研究は、現在存在する主たる作家の作品集や雑誌作品からこれらのことを推定しており、当時の莫大な量の新聞（総合新聞や小新聞を含む）・雑誌などの資料に基づいて、同時代の感覚に立ちかえり、考察を加えていないと考えられ、その妥当性が不十分であると思われるからである。

中国における近代探偵小説は、清末における翻訳ブームによる西洋近代の新たなエンターテインメント小説の受容、そしてそれを如何に克服するかという創作の試み、そしてその小説化という段階を踏んでいる。これらの諸相を明らかにするために必要なのは、当時の雑誌、新聞資料に即し、当時の人々が、探偵小説のどなどころに惹かれて受容し、何に不満を感じて離れていったか等の感覚へと立ち戻って行くことだろう。その時に重要なのは、作者や出版/編集に関わった発信者の立場だけではなく、当時の人々がどのように読んでいたのかという受容者、すなわち読者について考えることではないだろうか。

現在まで、近代エンターテインメント小説に関わる研究だけではなく、従来の文学史においても、発信者の側（作家が何を描いたか）が重視されてきた。純文学という分野であれば、発信者=作者は非常に重要な側面であろう。しかし、特にエンターテインメント小説という読者に消費されることを目的としていた小説に関しては、発信者よりも受容者に視線を向けたとき、おそらくそれまでに見えなかった側面が見えてくると考えられる。

以上のことを踏まえ、本稿では、中国において近代探偵小説の創作が本土化へ向けて行われたと考えられる1920年代に注目したい。1920年代に創刊した探偵小説を主に掲載した雑誌を対象として、そこに掲載されている作品ではなく、読者または批評家とおぼしき人々の単なる感想や時には真面目な評論を含んだ「雑評」を手がかりにしたい。

さらに、1920年代は日本にとっても探偵小説の発展を考える上で非常に重要な時期であった。という

受容しているため、中国でも「偵探小説（探偵小説）」という語ではなく、「推理小説」という言葉を使用している。

5) 中国偵探小説没有能够发展起来，人们（包括学术界）比较一致的观点是中国社会缺乏法制观念。（《中国现代通俗小说思辨录》北京大学出版社 2008年5月p87）

6) 《中国现代通俗小说思辨录》北京大学出版社 2008年5月p87

のも、探偵小説の発展に大きな役割を果たした『新青年』創刊、そして江戸川乱歩が登場したのである。ある意味において、日本においても本格的に探偵小説の本土化が見られた時代であった。

そこで、『新青年』誌上に見られる読者投稿も参考としてあげ、日中の1920年代における探偵小説創作の黎明の中の読者という側面に焦点をあて、日中の創作探偵小説における分岐の背景の一つを明らかにしたい。中国と日本における探偵小説の発展の差異を探って行けば、おそらく中国の近代性の独自性の一面を探る手がかりが得られるだろう。

2 1920年代創作探偵小説とその雑誌——『偵探世界』と『半月』及び続刊『紫羅蘭』

近代中国において、本土化した探偵小説⁷⁾が書かれるようになるのは、1916年前後からだと考えられる。⁸⁾ 上海では、雑誌『礼拜六』や、当時の各総合新聞『申報』・『時報』・『新聞報』などの文芸副刊や、当時の小新聞である小報の紙面に散発的に掲載されているのを確認できる。1920年代になり、『紅』雑誌や『星期』等多くの近代エンターテインメント雑誌が創刊され始めると、その中には、探偵小説を重要視して掲載するものや、探偵小説を専門的に掲載する雑誌が出現した。

その代表的な存在として、1923年に創刊された『偵探世界』と1921年9月に創刊された雑誌『半月』とその続刊『紫羅蘭』とがあげられる。

『偵探世界』は中国初の探偵小説専門雑誌で、1923年6月に創刊、1924年5月に停刊し、全24期を発行した。編集者は、巖独鶴、陸澹安、程小青及び施濟群が当初担当していたが、第13期で陸澹安が編集を抜け、その代わりに趙苕狂が入った。編集者に名前を連ねているのは当時の作家、または編集者として有名な人物である。

『偵探世界』は「人々に犯罪捜査に役立つような探偵知識を多く獲得させることにより、人々の心に潜む悪い動機を失くし、かつもって中国将来の犯罪捜査などの探偵知識を使った活動を作り出し、人道が危機に瀕しているのを支える」⁹⁾と第一期の「宣言」にあるように、探偵小説の勸善懲悪の要素、または科学的思考により、当時氾濫していた犯罪から身を守る、またはそれらを見抜く知恵を読者に身につけさせるという目的から創刊された。

探偵小説誌を目指していたようだが、この雑誌が掲載したのは、探偵小説だけではなかった。近代武俠小説の祖と言われる平江不肖生の『近代俠義英雄伝』を掲載するなど、探偵小説の他に、冒険小説及

7) 本土化した探偵小説とは、中国においては、中国人作家による、中国を舞台とし、中国人の主要な登場人物（探偵）によって構成される小説を意味する。つまり自国の風土、文化に即した探偵小説という意味で使用している。

8) 1916年12月には、『新聞報』文芸副刊『快活林』に「快活林奪標会」という投稿文芸コンテストが設けられ、その第一回の投稿テーマが「偵探小説 灯光人影」であった。これに基づいて行われた投稿から、13編が1916年末から1917年2月にかけて『快活林』に掲載された。この中に程小青の霍桑シリーズの第一作も見え、同時にいくつかの本土化した探偵小説も掲載されている。これらのことから、1916年当時には、読者に対して「探偵小説」の投稿を募ることが可能である空間が生まれていたことが分かる。詳しくは拙著《燈光人影—『新聞報』文藝副刊『快活林』與早期創作偵探小説》（《文學與美學第十一屆論文集》淡江大學中國文學學系 2010年10月）を参照されたい。

9) 使人人獲有偵探智識之益，而潛弭人心之惡機，且以造成中國將來之偵探事業，扶持人道於垂危。（〈宣言〉沈知方《偵探世界》第一期 1923年）

び武侠小说を掲載することを奨励した。

また、この雑誌では程小青などの作家が多く探偵小説を掲載するとともに、探偵小説に関する批評なども掲載した。

1923年に探偵小説専門誌が創刊されるのは、日本よりも早く、当時、探偵小説がもてはやされていたことが予想される。しかし残念なことに、発行期間が大変に短い。創刊後わずか一年で『偵探世界』は停刊となってしまう。まるで、中国の探偵小説の行く末を暗示しているかのようである。このような探偵小説専門誌が出現したことは特筆に値するが、しかし、この雑誌だけでは、当時の創作探偵小説の状況を考えるには不十分である。そこであわせて考えたいのは1921年に創刊された『半月』とその続刊『紫羅蘭』である。

『半月』はエンターテインメント小説の翻訳家（翻訳家としてシャーロック・ホームズ全集の出版にも関わっている）・小説家として有名な周瘦鵬が主編をつとめた雑誌である。1921年9月に創刊、1925年11月に停刊した。4巻96期を発行した。『半月』の停刊後、周瘦鵬は『紫羅蘭』を1925年12月26日に創刊、1930年6月に停刊し、4巻96号を発行した。

この『半月』及び続刊『紫羅蘭』の特筆すべき点は、中国人作家による創作探偵小説や探偵小説にまつわる雑評を掲載した探偵小説専門欄とも言える「偵探之友（探偵の友）」というコーナーをほぼ毎号掲載したことと、さらには探偵小説特集号を四号発行したことである。つまり、『半月』及び続刊『紫羅蘭』にとって、探偵小説は重要な位置を占めていた。また、発行期間が1921年から1930年に渡っている。10年に渡ってコーナーを設けて探偵小説を掲載し続けた雑誌は他になく、この期間の状況を考えるには、大変有益な資料と言える。

3 中国近代における「雑評」から見る探偵小説創作状況

ここで、まず資料とする「雑評」について説明しておきたい。

日本の近現代小説雑誌においては、読者投稿欄が各雑誌に設置されるのが珍しくなく、例えば、後で例に挙げる『新青年』（博文社）にも設けられていた。読者投稿欄では、雑誌に対しての投稿—読者からの要望・感想などを取り上げ、時には、編集者がコメントをつけての交流、もしくは投稿者同士の討論などが見える。もちろん、編集者は投稿されたすべての記事を掲載している訳ではなく、編集者によって選ばれた一部が掲載されているわけだが、それでも当時の読者がどのように雑誌を受容していたかの一端を見て取ることができ、当時の読者の姿を感じ取ることができる。

だが、近代中国の小説雑誌には基本的に読者投稿欄が存在しない。1910年代から盛んに新聞の文芸副刊において、投稿者が様々な作品を紙面に投稿して掲載され、時には投稿者同士の交流めいたものがうまれた場合もあった¹⁰⁾。さらに言えばそのような空間は1920年以降創刊された多くの雑誌で活躍する作家を育てるゆりかごのような役割を担っていた。1920年代以降も、小説雑誌は読者投稿による小説原稿の

10) 拙著「五十元の接吻—『新聞報』文芸副刊『快活林』「諧著」の近代性—」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第2分冊54 2008年3月）を参照。

募集を行っており、投稿は重要な原稿の来源となっていたが、しかし、その一方で、雑誌に対して多く寄せられたであろう一般読者の感想や要望を掲載し、編集者との交流をはかるような欄は設置されなかった。

しかしながら、編集者はそれらをすべて掲載しなかったというわけではないようだ。読者投稿を専門的に掲載する欄は存在しなかったが、雑誌紙面の端々に、短い編集者への要望などが書かれた記事、もしくは小説に関する感想が書かれた記事などが掲載されていることがある。その中には、当時の名の有る作家や批評家も含まれていれば、人物の特定が不可能な一般読者と見受けられるものもある。¹¹⁾

筆者はそのような編集者が意図した設置したコラムとは思えない、散発的に掲載されている批評や感想を「雑評」として考えたい。また時に批評家や作家の名前も含まれるが、批評家や作家でありながら、読み手として書いているものは「雑評」として取り上げて行きたい。

4 探偵小説の新しさ——読者が探偵小説に期待したもの

まず考えたいのは、読者たちにとって探偵小説とはどのような存在であったのかということである。探偵小説は、近代に生まれた小説であり、中国の古典小説とは異なっている。

果たして読者たちは探偵小説を読んでどのようなところに面白さや新しさを感じたのだろうか。雑評に次のような記載がある。なお、以下、引用部の下線はすべて筆者によるものである。

小説は、探偵、すなわち犯罪捜査をつうじて人に思索させる。故におよそ探偵小説の単行本の第一回、第二回を読むとまるで五里霧中に落ちたかのようで、往々にして後半にさしかかって、どんな結末か分かる。しかし、結末が分かると、読む興味が急に失せてしまう。故に、長編の探偵小説は日報や雑誌に掲載するのが一番良い。一回ずつ掲載し一回ずつ読んで、期待が盛り上がり事件も進んで、最終回にいたって、テーブルを打ち鳴らして絶賛する。その面白さたるや、言葉では言い表せない。¹²⁾

この雑評の中では、探偵小説を読んだ時の率直な面白さが語られている。小説が進むにしたがって、だんだんと謎解きの過程に引き込まれ、謎の核心に迫っていき、そして最後には「テーブルを打ち鳴らして絶賛する」という、つまり探偵小説の謎解きの過程に興味注がれていることが分かる。それが「言

11) 例えば、『偵探世界』第14期（1923年11月）には「禄爾摩斯」なる人物の「私が希望するのは」（原文：「我所希望的」という記事が掲載されている。「私が『偵探世界』編者の趙苕狂先生にお願いしたいことはたったひとつです。もし私の願いを叶えていただけたなら、満足するのは、私個人ばかりではありません。世界の多くの人々が、みなひれ伏してお願いすることでしょう。私がお願いするのは次のことです…（我所望於偵探世界編者趙苕狂先生的事，卻只有一椿。倘能如願償我，我知滿意者非徒我個人，大千世界，人人都當膜首以求也。我之所望維何，即下述者是…）」という読者と思われる人物の要望が続いている。

12) 小説以偵探爲耐人思索，故凡偵探單本閱一二回，如墮五里霧中，往往亟翻其下半本，以知其如何結果。然結果既知，閱之興味頓殺，故偵探長篇最宜刊於日報或雜誌，按回刊之，使人按閱閱之，懸猜如此，事實又如彼，及至末回，即拍案叫絕，其興味有非言語所能形容者矣。（〈偵探小説話〉逸梅《半月》第4期1號1924年12月11日）

葉では言い表せない」面白さであることから、探偵小説の謎解きにいたる小説構成などは、中国の読者にとって非常に新鮮で、面白みを感じるものであったことがわかる。更に、もう少し細かく具体的に何が面白かったのかということを考えてみると、次のように述べている読者がいる。

本雑誌の探偵小説で、私の好みから言って一番満足したのは、第六期の『傀儡劇』だ。この小説は構想が神秘的であるばかりか、小説の構成に無駄がない。特に優れているのは、いくつも伏線が張られていて、読者を八門陣に引き込み、知らず知らずのうちにどうどうめぐりをさせてしまうところだ。…（中略）…犯人のトリックについていえば、それを読んだとき、私は本当に作者の心配りに感服した、髪の毛よりも細やかだといってよい。¹³⁾

下線部から分かるように、読者を引き込んでいるのは、やはり、探偵小説の読者に謎解きを探偵と一緒に追体験させるような小説の構成であるようだ。特にここからは、「小説の構成に無駄がない(結構緊湊)」または「いくつも伏線が張られていて(層層設伏)」というような、構成に長けた探偵小説を高く評価している。

中国の探偵小説研究において、たびたび問題となるのは、探偵像である。なぜなら程小青らの代表的な作家が作り上げた探偵像が、コナン・ドイルのシャーロック・ホームズの影響を受けたものであり、彼らは競って「中国のホームズ(東方福爾摩斯)」を作り上げようとしていたように思われるからである。探偵という職業がなかった中国でいかに探偵像を作り上げるかというのは、また大きな問題であるが、上記の雑評から考えるに、読者が探偵小説の中で重要視していたのは、探偵像よりも謎解きの過程を読者に体験させる、読者を引き込む小説構成があったかどうかだったようである。

5 探偵小説創作の理想と現実

当時の読者は探偵小説の謎解きを主とする小説構成を非常に好んでいたようだが、それでは、彼らにとって当時の探偵小説ブーム、さらには中国人作家による探偵小説はどのように評価されていたのだろうか。

探偵小説は現在流行してきたと言えるだろう。どの雑誌にもこの類の小説がのっている。実はこの種の小説は我々読者にとって有益である。なぜなら我々の頭をすっきりと醒めさせる、愛だの恋だのを語るよりずっといい。¹⁴⁾

13) 本雑誌上の偵探小説，在我眼光中所認為最滿意的，要算第六期上「傀儡劇」一篇。這篇小說不但設想神奇，結構緊湊，尤妙在層層設伏，使讀者如入八門陣，盤旋於不知不覺之中。…（中略）…賊人的詭計，我讀到這個地方，真佩服作者的心，必頭髮絲還要細。（《偵探小說瑣話》恥痕《偵探世界》第十八期1924年1月）

14) 偵探小説在現在要算流行的了，任是那一本雜誌上，終得有這一類小說。其實這種小說對於我們讀者有益處，因為可以清我們的腦筋，比談情說愛的好多了。（范菊高《半月》第3期6號 1923年12月8日）

1923年12月の『半月』に掲載された上記の雑評からも、当時の読者に探偵小説の流行が自覚されており、そして探偵小説は、『偵探世界』誌上でも科学的思考¹⁵⁾を進めるなどの理由で奨励されているように、探偵小説が「頭をすっきりと醒めさせる（清我們的腦筋）」といった部分が積極的に受け入れられていたようである。

しかし、当時実際に中国人作家によって書かれた小説に関しては、実はかなり辛辣な意見が多い。

近頃、探偵小説を書くものが多いが、私が感服するものはない。文章がひどくなければ、表現力がまずい。だから、奇をてらって常識から外れたものもあれば、荒唐無稽で映画のようなものもある。構成は注意深く厳密に、事件を解決した後は、常識に背かないことが必要である。また人々の中で、皆がわくわくして読みたいと思うものは多くないが、いないわけでない。それが程小青だ。¹⁶⁾

現在、出回っている探偵小説には、いいものがほとんどない。どれも皆おもしろおかしく書かたてて、からくりばかりに重きをおいている。こういうのは、映画的だ。くどくどしく、些細なことに多くの紙面を割き、文意は通らず支離滅裂で、読めば頭がすっきりするどころか、混乱するものもある。¹⁷⁾

これらが指摘しているのは、最近探偵小説が流行してきたという事実がありながら、書かれた作品の質がよくない、ということである。探偵小説の質として何がまずいのかというと、文章や小説の構成がなっていない、というのが批判の内容になっており、しっかりとした謎解きの構成をもって描かれたものが少ないということが推定できる。もう少し細かく見てみよう。

私が読んだ探偵小説は、創作と翻訳をあわせて二百余篇にもなるが、創作ものはやはり翻訳ものほど妙味がない。…（中略）…外国の探偵作家の考え方は非常に深い。…（中略）…犯した罪が大きければ大きいほど、事件は複雑になっていき、そうすれば、探偵役も頭を使い、知恵を振り絞って犯人と戦わなければならなくなる。…（中略）…読者をはらはらさせ、先が読めないようにすると、興味が自然と高まるのだ。わが国の探偵小説家は、おそらくこのようなことに考え至っていないだろう。だから犯人は取るに足りないこそ泥で、名前は探偵といっても実は、形をかえた捕吏にすぎ

15) 『偵探世界』では科学的な探偵知識（指紋や当時の警察の捜査方法などの）の紹介や、さらに程小青の〈偵探小説和科學〉（『偵探世界』第十三期 1923年11月）などのコラムが掲載されている。

16) 爾來執筆爲偵探小説者夥矣，予均不佩服。非文字惡劣，即達意不善，故故炫奇而悖乎常理者有之，支離怪誕而近乎影戲者有之。求其佈局謹嚴，而破案後不背常理。又在人意中，使人驚心欲目者，實不多觀，有之，厥爲程君小青乎。（〈近今之偵探小説〉王天恨《半月》第2期21號 1923年7月14日）

17) 現在市面上的偵探小説，難得有幾部好的。都是喜敘熱鬧，著重於機關，這種是電影式的了。有幾種竟羅羅嗦嗦，一些兒事情，卻占了許多篇幅，文理粗劣，莫名其妙，看了不但不能清腦，反而煩惱了。（〈偵探小説雜評〉范菊高《半月》第3期10號 1924年2月5日）

ない。¹⁸⁾

上にあげた雑評では、はっきりと創作ものは翻訳ものほど面白くない、と言っており、取り扱う犯罪などの探偵小説の構想自体が、貧困だと痛烈に批判している。

つまり、当時の読者は、探偵小説の流行自体は、「頭を醒めさせる（清我們的腦筋）」ものとして歓迎していたが、実際に中国人作家によって創作されたものはどうであったかという点、探偵小説としての構想や、読者を謎解きに誘導する小説構成などをしっかりと書けたものがないと感じていたということである。読者が、翻訳探偵小説などを読んで培ってきた探偵小説としてこうあるべきという姿に、創作探偵小説がおいついていない、という現状が見えてくる。つまり、読者が想像する理想の探偵小説と、実際に書かれていた現実の探偵小説に大きな落差があったということを意味している。

6 探偵小説創作の苦惱——作者/読者の立場から

確認したように、読者の想像する理想の探偵小説を中国人作家の創作では、なかなか実現できない現状があった。そこには探偵小説創作にまつわる難しさがあったようである。雑評の中には、探偵小説の創作に関する難しさに関する記述も見ることができる。

常に小説に題名をつけるのは難しいといわれている。…（中略）…私は他のジャンルの小説ではそこまでの難題だとは思わないが、唯一探偵小説では一番の難題であるように思う。抽象的な字面では、探偵小説のように見えないし、あまりにあからさまでも読者に内容を見透かされてしまう。なぜなら探偵小説は謎にはかならず、決して事件の真相を読者に題名から知られてはならないので、最も難しい。他のジャンルの小説とくらべるべくもない。¹⁹⁾

探偵小説の題名に関してはこれだけでなく、他にもいくつかの雑評でその難しさについて述べられている。中には「私が思うに、探偵小説は題名がないのが一番いい」²⁰⁾という意見すらある。引用部からも分かるように「他のジャンルの小説と比べるべくもない（不必他種小説）」ということは、当時の人々にとっても探偵小説の特異さは自覚されていたということである。

18) 在下讀過的偵探小說，著的譯的統計也有二百多篇了。覺得著的終及不上譯的興味濃郁…（中略）…外國的偵探作家眼光遠大…（中略）…犯的罪惡越大，案情也越是離奇複雜。那麼做偵探的不得不運用他智慧，絞盡他腦汁，和罪犯釣心鬥角…（中略）…使讀者驚心動魄，捉摸不定，興味就自然而然的提高了。我國的偵探作家大概沒有考慮到這一層意思。所以罪犯大都雞鳴狗盜之流。名為偵探，其實一個變相的捕快而已。（〈偵探譯稿和創作的兩面觀〉俞慕古《偵探世界》第十期 1923年10月24日）

19) 常有人說小說容易做題名難。…（中略）…我以為他種體裁的小說，尚不十分難題，惟有偵探小說最難題。空泛的字面，便不像偵探小說，太顯豁又不免使讀者看穿內幕。因為偵探小說啞謎無異，萬不能把案中的真相，使讀者見了題名而料知，所以最難，不必他種小說。（〈偵探小說的題名〉天攘王郎《偵探世界》第二十三期 1924年4月1日）

20) 我以為偵探小說頂好沒有題。（〈最好沒有題目〉芝《偵探世界》第四期 1923年）

そのようなそれまで存在した小説ジャンルとは異なった小説に対して、一番違和感を感じていたのは、当時探偵小説を書いていた作家であったようだ。実は、『偵探世界』や『半月』の雑評の中で、読者からの雑評に混じって、探偵小説を書くのは難しいという書き手の吐露を見ることができる。

我々は社会または家庭小説を書く場合には、取材が容易なので、二、三十万字でも書く事ができる。他のジャンルの長編小説でもだいたい書いたところまで構想を練ればよい。例えば、第三回を書く時に第三回の話を考え、第四回をどのような話にしようかなどは考えない。第三回を書き終えてようやく考え始める。第三回の話が続けるか、それとも他の話をはじめるか、なんでも可能である。しかし、長編探偵小説を書くとなると、絶対にそうはできない。書き始める時には、必ず、全編の物語を、おおむね腹で練っておかなければならない。それからひとつひとつ書いて、はじめて全体の筋が通り、前後のつじつまが合う。なぜなら、前に書いてあることはすべて後の原因であり、後ろに書く事は、すべて前の帰結であるからだ。もしむやみに書いてしまうと、間違いや矛盾が生じるのを避けられない。これも長編探偵小説を書く難しさの一つである。²¹⁾

張碧梧は「家庭偵探」シリーズなどで、『偵探世界』や『半月』に書いていた作家であるが、ここで、探偵小説の構成の難しさについて、かなり正直な心情を吐露している。探偵小説ではない小説——つまりまだ古典小説の形式を保っている小説——は、章回小説体であり、思いついたままに書いていくことができるが、探偵小説に関しては、作品すべてが呼応していなければならないので、そこが難しいと言うのだ。また他の文章で、張碧梧は、探偵小説の「三大難点」をあげる。²²⁾ 一つ目は、探偵小説になるような題材を集めること、つまり取材の難しさ²³⁾、二つ目は、小説の前半で出た謎を後半でうまく解き明かしていかなければならないこと、つまり小説構成の難しさ²⁴⁾、三つ目は、探偵小説は他のジャンルの小説と異なって、ロジックによって進めていかなければならないので、文章もすっきりと書かなければならないこと、つまり文章の難しさ²⁵⁾だ。

小生、家庭探偵宋梧奇を書いて、すでに四、五十作になります。『半月』及び『紫羅蘭』に前後して掲載しましたが、プロットは簡単で、文章も拙く、恥ずかしい限りです。毎篇の構成がまたほぼ同じで、最初に事件のあらまし、中ほどに探偵の推理の経過、最後には結末と、平板なこときわま

21) 我們做社會或家庭等小說，因為取材容易，二三十萬言也能夠做下去。做別種體裁的長篇小說大概都是做到那裏，想到那裏。譬如要做第三回纔想第三回的情節，第四回中是甚麼情節，並不顧到。得到第三回已經做完，這纔用思想起來，或是第三回的情節做下去，或是另外尋一個頭緒這都無不可的。但是做偵探小說長篇絕對不能這樣，在剛正動筆做起的時候，必須把全篇的情節，大概凝個腹稿。然後一層層的做下去。纔能前後貫通，有呼有應，因為前面所述，都是後面的根由。後面所述，又都是結束前面的。倘胡亂的做起來，便難免有錯誤和矛盾的地方了。這也是做偵探小說長篇的一種難處。（〈偵探小說之難處〉張碧梧《偵探世界》第十六期 1923年12月15日）

22) 〈偵探小說之三大難點〉碧梧《偵探世界》第十五期 1923年12月1日

23) 取材之難（〈偵探小說之三大難點〉碧梧《偵探世界》第十五期 1923年12月1日）

24) 結構之難（〈偵探小說之三大難點〉碧梧《偵探世界》第十五期 1923年12月1日）

25) 行文之難（〈偵探小說之三大難點〉碧梧《偵探世界》第十五期 1923年12月1日）

りないので、非常に遺憾に思っています。この作品は特に新機軸を打ち出しました、ただ事件のあらましと結末を説明しただけで、探偵の推理の経過は省き、次篇で詳しく説明します。読者は読み終わったあと、自身の推理を構成して、次篇を発表した時に、小生のものと合っているところがあるか、比べてみるすることができます。読者が考えるのは、小生が考えるものより、複雑で面白いのではないかと思います。どうかご教示いただければ幸いです。²⁶⁾

上にあげたのは、雑誌に掲載された短編「吃了年夜飯後（大晦日のご馳走を食べたあとに）」の終りに張碧梧が書いた後記である。この中で、彼は、大量に探偵小説を書きながらも、小説構成という点で、良いものを書けていないという自覚があることを述べている。面白いのは、張碧梧自身が探偵小説創作の難しさを自覚し、そして自分の作品を客観的に見て、自分なりの新機軸をくふうしている点だ。当時探偵小説を創作しようとしていた作家はほぼすべてが、探偵小説の熱心な愛読者だったといってよい。つまり張碧梧も熱心な探偵小説の愛読者であり、自分自身でも面白いとする探偵小説像があったのだろう。しかし、書き手としてはその理想になかなか近づけない、読者としての自分と、作家としての自分のジレンマがこれらから読み取れる。

以上の分析から、当時の中国における探偵小説の受容と創作の状況が浮かび上がってくる。当時、読者の間でも探偵小説の流行が自覚されており、また探偵小説は科学的思考を推進するものとしてその流行は歓迎されていた。しかしながら、創作として出てくる探偵小説は、読者が読みたいと思う小説、すなわち謎解きの過程がしっかりと描かれた、探偵小説としての構成をしっかりと備えている作品の数は少なく、読者の理想とする探偵小説を書き手がなかなか書けないという現状が存在していた。

だが、先に見たように、この現状に書き手も満足していたわけではない。従来の中国の小説と小説構成や題名のつけ方などがまったく異なっているという探偵小説創作の難しさを書き手も自覚していた。しかしながら、それをなかなか克服できなかったのだ。

それでは、当時の日本はどうだったのだろうか。1920年代に日本の探偵小説も大きく本土化へと動いていく、読者投稿の中で探偵小説に関してどのような言説が存在するだろうか。日本の探偵小説普及にたいへん大きく貢献した博文館の『新青年』の読者投稿欄を見ることにしよう。

7 近代日本と探偵小説——『新青年』とその読者

『新青年』は1920年1月、森下雨村を編集長として、博文館より発行された。1950年まで何度か編集者を変えながら続刊した。『新青年』は、伊藤秀雄が『大正の探偵小説』（三一書房 1991年4月30日 p249）

26) 鄙人撰家庭偵探宋梧奇，已不下四五十種。先後刊載《半月》及《紫羅蘭》，情節簡單，行文拙劣深為懺愧，而每篇之佈局，又大率相類，初為案情，中為偵探經過，後為結果，大同小異，板滯非常，尤以為憾。茲篇特別創一格，只說明案情與結果，而不闕其偵探經過，容於次篇中詳述。讀者於閱竟次篇後，不妨各■意想所及構成一種偵探之經過情形，迨次篇發錶時，與鄙人者一比較之，有無相同之點。鄙人者料知，讀者之所構，精妙曲折必有遠甚於鄙人者，曷蒙書示逼人極願受教也。（〈吃了年夜飯後〉張碧梧《紫羅蘭》第2期5號 1927年2月16日）■は印刷状態が悪く判別できない文字。

で述べるように、「興味を中心に有益な青年雑誌」を標榜して、翻訳探偵小説ならその主旨にかなうという考えと、森下雨村の好みもあり探偵小説の掲載に力を入れた。その動機として、

英国現代の有名な評論家であるチェスタートン氏が『探偵小説は紳士の愛読するものである。好い探偵小説は、決して世俗の解するが如き、低級な読み物ではない』といつたことがある。探偵小説にも種類がある。拙らないものもあれば、大いに趣味の深い高尚なものもある。本誌編輯局が春季増大号として探偵小説を選んだのは、高級な趣味の読物として、チェスタートン氏の所謂紳士の愛読すべき探偵小説の傑作を読者諸君に提供せんとするに外ならない（傍線は引用者）²⁷⁾

上記の「高級な趣味の読物」からきた「高級な探偵小説」という言葉が再三繰り返される。探偵小説を広めようというかなり強い意気込みのあることが分かる。

毎号多くの翻訳探偵小説を掲載したほか、「探偵奇談号」（二巻一号）、「怪奇探偵号」（二巻四号）、「探偵小説傑作集」（二巻九号）など、探偵小説特集号を発行するとともに、書き手の養成として隔月で探偵小説の懸賞を行った。その中に横溝正史や江戸川乱歩が見える。現在では、日本において探偵小説がより広く知られ、人気を博すようになったターニングポイントを作った雑誌として知られている。²⁸⁾

ただ、『新青年』は必ずしも探偵小説専門誌ではなかった。探偵小説の他に、冒険小説や、海外雄飛の記事など掲載された文章は多岐にわたる。さらに「誌友倶楽部」という読者投稿欄を設け、広く読者からの意見を募り、時には編集者も参加して討論した。

『新青年』が目指したのは、文字通り新しい青年たちへの雑誌であった。「創刊号はもとより、二月号も全部売り切れといふ有様である。その実証は、創刊号発刊後、旬日ならずして記者の机上に集った読者諸君からの通信が、実に数万通に及び、編輯小僧はこれが整理に四日間を費したに見ても知られる。」²⁹⁾とあるように、反応はずいぶんと良かったようだ。

それでは、探偵小説について読者はどのように語っているのだろうか。「誌友倶楽部」を見る限り、探偵小説に関する投稿は、全体の比率から言えばそれほど多くはない。探偵小説の増刊や特集号があったあとにいくつか掲載されているくらいである。

誌友諸君！本誌の夏期増刊はどうですか？正に、我々探偵小説愛好者をして恍惚たらしめるものではないか？僕は殊に特別付録を熱心に耽読して居ます。将来日本の探偵小説作家たる私達にとつて正に貴き虎の巻である。（東北のオーナンドイル）³⁰⁾

増刊探偵小説集は実にすばらしいものであった。僕は嬉しくて堪らない！先づ痛快至極なものは

27) 「春季増大号予告 探偵小説傑作号」（『新青年』第一巻第二号 大正9年3月1日）

28) 『新青年』に関しては、『大正の探偵小説』（伊藤秀雄著 三一書房 1991年4月30日）を参照。

29) 「誌友倶楽部」『新青年』第一巻第二号 大正9年3月1日

30) 「誌友倶楽部」『新青年』第三巻第十二号 大正11年9月10日

「辻強盗」「飛行自動車」だ！「十一の瓶」は最後まで一気に読んでしまった。(名古屋 芳村猛)³¹⁾

上の二つはいずれも、「探偵小説傑作集」(二巻九号)の後の反応である。非常に感激して探偵小説を読んでおり、探偵小説を娯楽として愛読しているのがわかる。実際『新青年』の読者の中には探偵小説愛好者を標榜する読者が少なくなく、探偵小説の愛読者を獲得していった雑誌だといえるだろう。ただ、『新青年』の探偵小説を掲載するという姿勢が必ずしも歓迎されたわけではなかった。

探偵小説に関する投稿に関して、森下は特に大きくとりあげていたようではなかったが、大正11年12月1日の第三卷第十三号に、突然、読者投稿欄に探偵小説掲載の可否をめぐって討論が出現した。さきに、読者投稿欄には探偵小説に関する投稿は少ない、と書いたが、取り上げられることは少なくとも、この討論の出現と成立により、当時の『新青年』に少なくない探偵小説愛読者が存在していたことを示唆している。討論を見てみると、当時の『新青年』の読者がどのように探偵小説を考えていたかの一端がわかる。『新青年』探偵小説の掲載の可否の討論をめぐって、当時の読者の探偵小説に対する反応を確認してみたい。

8 現代の青年と探偵小説

発端は、大正11年12月1日に第三卷第十三号の「誌友倶楽部」に掲載された、北海道の野坂碎星なる読者の投稿であった。

私が此の新青年に要求したいことは先づ本誌の名称と実質が大いに異なつてゐると云ふ事であり
ます。少なくとも新青年と云ふ意味に於いて近代の青年は探偵作品を歓迎してゐませうか、恐らく
さうではないだらうと思ひます。私は只現代青年の思想の向つてゐる所に意をとめられて発足した
ならば益々本誌の価値は認められることと思ひます。諸君どうです。

『新青年』に探偵小説は必要かどうか、現代の青年の思想に探偵小説は必要かどうか、という投稿に対して、編集者は、読者の意見を聞こうと投稿を募った。³²⁾ それに対する答えとして、『新青年』第四卷第三号³³⁾の「誌友倶楽部」に7つの読者投稿が掲載された。その中には、青年のための雑誌に探偵小説ばかりを掲載するのは不公平なので、掲載数を少なくすべきという意見³⁴⁾や現代の青年には探偵小説よりも

31) 「誌友倶楽部」『新青年』第三卷第十二号 大正11年9月10日

32) 募集の文は次のとおり。「これは誌上討論の価値ある問題だと思ふ。探偵小説が多すぎるといふ投書も随分多いしま
た盛んに探偵小説を掲載せよといふ投書も随分来る。詰り賛否交々であるが、何が故に——といふ徹底的な意見は
殆どない。記者には記者の意見があり、主張があつて探偵小説に相当の頁を割愛してゐるのであるが、諸君の眞実
の意見は如何か、誌上討論の好題目として提出し一般読者諸君の意見を聞きたい。」(一記者) (「誌友倶楽部」『新青
年』第三卷第十三号 大正11年12月1日)

33) 大正12年2月1日発行

34) 掲載された意見は次のとおり。「新青年は名称に於いて探偵小説愛好者ばかりの小さな天地ではない。少なくとも凡

文藝記事の方が必要だという意見³⁵⁾、突然の探偵小説に対するある意味での攻撃に現代の青年は、探偵小説を支持しているという探偵小説愛好者からの反論³⁶⁾が見える。探偵小説をどのように読者が評価しているのかという観点で考えると、次の二点の投稿がある。

現今の青年が悉く探偵作品を歓迎してゐるかどうかは疑問である。然しつまらぬ創作的の女々しい小説や新聞の転載の如な時事記事や、親爺が小児に云ふ様な飽きあきする如うなものは望んでは居ないだらう。少なくとも現今の日本の状態が判つてゐるものは海外に発展をせなければならぬ事を知つてゐる筈である。常識を發達させるに付けても本誌は努力してゐると思ふ。即ち科学小説や探偵小説は至極結構だ。自分は在来の如く探偵小説や、海外の記事を多く載せられん事を望む者であります。(反野流星)

探偵小説に対する愚考を申します。今一の探偵小説を読むにしても単に頭から作り事だその様にうまく犯罪が解決されるものでないとしてしまふならばそれ切で何の楽味も効果もありません。が事実であるとし又た事件を取り扱ふ探偵の方針に注意を払ふならば頭は練磨され緻密になり自然事件の先々を想像して、興味が湧くでせう。そして人間社会の事を探偵眼で見ると一層有益だと信じます。(BI生)

この二つの投稿は、探偵小説は娯楽であるという他に、人々の考え方を進歩させて、世界に通じる常識を發達させると言う方面から探偵小説を評価している。

これは先ほど見た中国における探偵小説の評価とそう変わらない。つまり探偵小説の受容期から実作期にかけて、探偵小説は、海外からやってきた新しい思想を人々に提供し、人々の考え方を進歩させるという点から、日中両国において評価されてきたことが分かる。

百青年向の雑誌であらねばならない。然るに其の内容が余りに不公平である、だが探偵小説とても多少掲載する必要がある、然し何と言つても只今では多過ぎる様だ、記者はよろしく一大英断を以て大改良を加えられ度い。(兵庫 谷水忠太郎)」

35) 掲載された意見は次のとおり。「種々なる方面の記事を網羅する本誌に、文藝記事のないのは遺憾です。小くとも現代青年の知識の一端として、文藝的思想は必要であらうと思ひます。探偵小説の是非。興味を持つ諸君には、同情は出来る、単なる娯楽としても、毎月の掲載数は、これ以上に出ない限り非とするにもたらぬでせう。(十九四)」

36) 「僕は探偵小説（高級）に双手を挙げて賛成する。高級海外探偵小説を満載せられ度し、北海道の野坂君はまだ探偵小説を理解してゐないですね。君は現代の青年思想を代表してゐるやうなことを云つてゐるがあれはまちがつてゐるだらう。記者様投票によつて可否を決せられてはどうです。(香川SN生)」

「北海道の野坂くん、君自身が探偵小説が嫌ひだといつて全部の読者が其通りだと思つては大間違ひですよ。殊に現代の青年は歓迎して居ないなど言はれては探偵小説愛好者たる我輩が黙つてはゐられない。兎に角君の議論は本誌から探偵小説を除かんが為の口実としか受取れない。僕達は君の説には余り関心しないよ。(秋田 瘦蛙)」

「大人気ないが山菓子の葉書一枚奮発してやる俺は探偵小説が目的で新青年を買つてゐるので殆ど他をかへりみなかつたが今日はひまだからちよい、拾ひ読をしてみた、ついでに誌友倶楽部とやらを見た、とどうだ此ざまはこんな齒の浮くやうなことをよく臆面もなく投稿したものだ、こんな連中がうよゝゐるから勢い営利上雑誌の前半をくだらぬ駄文で埋めなければならぬかと思ふと実に心外だちつと頭を肥せ、紙が惜しいわい。(神戸人夫)」

中国の雑誌における雑評からは、当時創作されていた探偵小説について、読者の側から作品の質の低さを嘆く、または作者の側からの創作への苦悩に関する評価が割合多く見られた。だが日本の『新青年』の投稿欄においては、探偵小説は面白い、歓迎するという意見が見られ、翻訳探偵小説に関してかなり高い評価をしていることも見て取れる。しかし、日本の創作に対して、読者が注文をつけていることはない。

創作の状況については、『新青年』で行われた懸賞探偵小説の選評の中に編集者森下雨村の評価から見ることができる。読者投稿欄の記述ではないが、当時の日本の創作状況を確認するために、「読者投稿」から成立する懸賞探偵小説の選評から見てみよう。

9 『新青年』における探偵小説創作

『新青年』は隔月で探偵小説の懸賞を行っており、その条件は、「四百字詰原稿用紙十枚以内、賞金一等拾圓、二等五圓、選外佳作と雖も掲載の分には薄謝を呈す」³⁷⁾となっている。懸賞が行われる号では、森下雨村による選評が掲載されている。

その中で森下は、探偵小説の創作について、「探偵小説の創作といふことは決して容易なものではない。殊にそれが十枚くらいの制限された短い紙数では一層困難である。³⁸⁾」と述べており、その創作の難しさを指摘しながらも「それだけに本誌の応募家諸君の苦心も察しられるし、また選者を驚かすやうな傑作の出ないのも無理ではないと思ふ。と同時にさうした困難があるにも拘らず、毎号多数の諸君が募に応じて苦心の作を寄せられるのを多とするのである。」³⁹⁾と続けるように、実際のところ、応募作にはなかなかよい作品が見られなかったようであるが、毎回多数の応募作が寄せられていた。

選評は毎回最終候補に残った作品に対して行われ、かなり細かく書かれている。その中から当時の作品を考えてみたい。

当時の投稿作の中には、外国ものの翻案風のものも少なくなかったようだ。「『三個の凶器』は既に二回当選した、八重野くんの作だけに、大いに敬意を払って読んだ。が、半ばならずしてそれがチエスタートンの翻案と知つて聊か失望せざるをえなかった。」⁴⁰⁾や、「大体に於いて外国種の翻案らしいのが最も多かった。中には活動写真の探偵物の筋をその儘失敬したもの等もあつたが、是は余り感心しない。」⁴¹⁾という言葉からもわかる。ただ森下はそれは是とせず、あくまでも自分のアイデアのものを募っている。

その甲斐あってか、その一年後には、「次第に粒が揃つて来たのは事実だ。やはり応募家諸君の努力がだんだんと真剣になりつつある証拠だと思ふ」⁴²⁾と述べているように投稿者のレベルも少しずつ上がっていったようである。さらに翌年には、次のようなコメントが書かれている。

37) 『新青年』第一巻第八号「探偵小説選評（第三回）」大正9年8月1日

38) 『新青年』第一巻第八号「探偵小説選評（第三回）」大正9年8月1日

39) 『新青年』第一巻第八号「探偵小説選評（第三回）」大正9年8月1日

40) 『新青年』第一巻第十号「探偵小説選評（第四回）」大正9年10月1日

41) 『新青年』第一巻第四号「懸賞探偵小説選評」大正9年4月1日

42) 『新青年』第二巻第十三号「懸賞探偵小説選評」大正10年12月1日

村上文雄君の『白金板の行方』、西田君の『熊か人か』共に面白く拝見した。前者は北海道を背景とした科学的探偵小説として後者は同じ北海道の漁業地に起つた殺人事件をとり扱つたものとして、共にかなり達者にかけてあるが、未だ未だ物足りない憾みがある。……(中略)……横溝君の『破れし便箋』は無難な佳作である。学生向きの探偵小説として上乘である。確か横溝君はこの作を三度書き直したやうに思ふ。その苦心と努力とに敬意を払つて特に中学世界に推薦することとした。⁴³⁾

北海道を舞台にするなど、様々な題材の探偵小説が出て来、さらに投稿者は何度も自分の作品を書き直しを行っていた。さらに、森下の選評は、ただ作品を評価するだけでなく、「一般に当選圏内に近づかない作品に対しては先づ第一にしつかりと筋を掴んでからゆつくりと筆を執ること、文章よりも平易に解りやすくすらすらと書いて貰ひたいことを希望する。」⁴⁴⁾ などというように探偵小説を書く場合の注意点なども書いている。

その甲斐もあってか、一つのエポックが訪れる。第四巻第五号（大正12年4月1日）で江戸川乱歩が『二銭銅貨』によってデビューしたのである。江戸川乱歩に関しては特に選評はないが、同号に、不木生⁴⁵⁾ による「『二銭銅貨』を読む」という文章が掲載された。

三度の飯を四度食べても、毎日一度は探偵小説を読まねば気が済まぬといふ自分に、『二銭銅貨』のやうな優れた作を見せて下さつた森下さんは、その功德だけでも、兜率天に生れたまふこと疑なし。碌に読めもしない横文字を辿つて、大分興味を殺がれながら、尚ほ且外国の探偵小説をあさつて居たのも、実は日本にこれといふ探偵小説が無かつたからである。ところが『二銭銅貨』を読むに至つて自分は驚いた。『二銭銅貨』の内容にまんまと一杯喰されて多大の愉快を感じたと同じ程度に日本にも外国の知名の作家の墨を摩すべき探偵小説家のあることに、自分は限り無い喜びを感じたのである。……(中略)……かうして見ると日本にも隠れたる立派な作家があることがわかつた。否、まだ外にもあるに違ひないといふことが推定された。それ故、『新青年』の編輯者が、かゝる隠れたる作家を明るみへ出さうと企てられたことに自分は満腔の賛意を表するのである。

ここにおいて、外国作家と比肩しうる探偵小説作家の誕生を確認する事ができる。それにはとりもなおさず、森下雨村など『新青年』編集部による探偵小説の掲載、そして探偵小説懸賞の功績があるといえるだろう。

以上により、『新青年』では、探偵小説は当時青年に科学的思考を身につけさせる娯楽として受け入れられていたということ、さらに『新青年』を中心に探偵小説の愛好者が増えていき、探偵小説懸賞などの積極的な活動によって、探偵小説の創作の困難さはあつたものの、若い作家が繰り返し投稿し、ついには江戸川乱歩という、外国の探偵小説作家に比肩しうる作家をうんだ、ということが確認できる。そ

43) 『新青年』第三巻第二号「懸賞探偵小説選評」大正11年2月1日

44) 『新青年』第二巻第十三号「懸賞探偵小説選評」大正10年12月1日

45) 探偵小説研究家、作家である小酒井不木。

して江戸川乱歩に続くようにして、甲賀三郎や大下宇陀児らも『新青年』ではないが、他の雑誌の懸賞から生まれ、次第に探偵小説文壇が形成されていった。

10 終わりに

以上、1920年代に、中国と日本において、探偵小説を積極的に掲載した雑誌の雑評空間を通して、当時の創作状況を見てきた。

そこからわかってきたのは、1920年代において日中の読者たちは、ともに探偵小説を現代的・科学的思考を推進する娯楽小説として受け止めていた事である。そして作者たちも、どちらもさかんに創作をしようとしていた。また、創作するという点から考えれば、創作の難しさは中国でも日本でも自覚されており、理想とするような実作に反映するのには時間がかかっていたようだ。

ただ、中国と日本の比較を考えた時に、際立っているのは、中国の探偵小説を書くのは難しいという作家たちの意識である。もちろん日本においても、森下が言っていることから分かるように、探偵小説創作は容易ではないという意識はあった。しかし、中国の方が、当時の社会小説などと比べて格段に難しいという、書き手側の苦心がより具体的に出てきており、探偵小説を自分のものとして書けた作家は、結果的に日本よりも格段に少ない。

この背景にはひとつとして、中国は投稿で原稿を募ってはいたが、懸賞小説はたいへんに少なかったという事実が影響しているのかもしれない。

1923年11月に『偵探世界』第14期において「偵探小説大懸賞」を行うことが発表された。「唯一之疑點(唯一の疑点)」という題目で投稿が募られ、その結果が同年3月の第21期に発表され、三編が発表されている。二三百篇以上の作品が投稿された⁴⁶⁾とされているが、それ以後誌上では懸賞小説は行われなかった。

つまり、『新青年』のような連続的に懸賞小説を行って、選評を毎回発表し、若手の作家を雑誌としてある方針をもって育てていく、ということも行われなかった。そのために、探偵小説作家の養成がうまくできなかったというのが、原因のひとつかもしれない。

1920年代にお互いに探偵小説の中国化、日本化を模索していた中国と日本だが、どうやら、この本土化の過程において、積極的に探偵小説愛好者とその作家を養成しようとした日本と、雑誌の中でそのような活動を展開し得なかった中国とで差が次第についていったようである。これは、当時の中国の探偵小説愛好家にとってはすでに自覚されていたようである。

日本の近年の探偵小説の発展は、目を見張るものがある、例えば、『新青年』や『探偵趣味』などの専門雑誌が、出版されるたびに売り切れ、その増刊も再版しなくては、足りない。国民の思想趣味の進歩が見て取れる。一般の作家も努力し、特に注意すべきなのは、彼らが頭をしぼって小説を

46) 次のようなコメントが雑誌に掲載されている。「懸賞小説披露」此項懸賞小説、投來者不下二三百篇。(〈編餘瑣話〉茗狂《偵探世界》)

精錬することだ。書き直しの後にまた書き直しし、何ヶ月かをかけてやっと一篇の完全なものとして発表する。無名作家は、自らの自信作を発表するために、ついには外国の有名作家の名前を用いて翻訳という名目で雑誌に発表することをいとわない。わが国の大作家たちが、無理に翻訳したものを自分の作品と偽るのと比べてみると、なんと可笑しい対比ではないだろうか。⁴⁷⁾

ここに近代中国の探偵小説がうまく発展して行くことができないことが、まるで思想の遅れだと受け止めるような焦りを見る事ができる。

中国がうまく探偵小説をかけない、面白い作品が生まれないというのは、当時の読者にとってすでに自覚されていたことであった。ならばどうして中国の作家たちは、探偵小説をうまく構成し、描くことができなかつたのか。もしかしたら、雑評の中で、書き手が嘆いていたように、古典小説の体裁と全く違う探偵小説を克服するための、文体や小説の構成を十分に手にいれることができなかつたのかもしれない。特に中国では、翻訳探偵小説は文言で書かれ、創作小説も最初期は文言であった。それが白話によって多く創作されるようになるのは、本土化の始まる1920年代である。つまり、探偵小説を書くときに、その内容の本土化と、それを成立させる近代的文体の獲得を同時に行わなければならなかつたのではないかと考えられる。その彼らの探偵小説を創作し得なかつた理由をさぐることによって、探偵小説を通して中国エンターテインメント小説の近代化を考えることができるだろう。この問題は、引き続き作品の具体的な分析を通して考えていきたい。

47) 日本近年來偵探小説的發展，真可驚佩，如專門雜誌「新青年」「偵探趣味」等，每一出版，沒有賣餘贖的，而其增刊，不是再版，還不夠敷衍，可見其國民思想趣味之進步。而一般作家之努力，尤可注意，他們苦思精練，改修後又改修，要費幾箇月的工夫，才把一篇完全的東西發表問世，更有些無名的作家，爲要發表自己得意之作，竟不惜借用外國名作家的名字，用翻譯的名目刊載出來的。拿來我國的大作家們，硬把翻譯的東西冒充自己的作品來比較，不是很可笑的對照嗎？（〈匿名的偵探小說家〉藍蔚邦《紫羅蘭》第四卷四號 1929年8月15日）

